

之爲知茶入は名物と云物也、何れも茶之湯之時は、必盆點也、取あつかひも大事ニかくべし。  
 〔茶之湯六宗匠傳記〕<sup>六</sup>一盆點はむかしの式正の茶之湯なり、當世の盆點は、昔ノ式正の中より下の侘のする事也。

〔槐記〕享保十二年五月廿三日、參候、今ノ世ニハ唐物トサヘイヘバ、盆ニノセテ益ダテニスル、ナキコトナリ、唐物ニテ益ニノスル物ハ、ブンリン、丸ツボ、肩衝小ツボ、コノ四ツノミナリ、其外ノ唐物ハ盆ニノセズ、唐物ダテニスルコトナリ、常修院殿○慈胤ニ所望セシカドモ、其道具ナシトテ終ニアツバサレズ、三菩提院○貞敬ニハ、小壺アリシ故、御手前ニテモ、後西院ニテモナサレシ故、其法ハ見知リヌト仰○近衛ヲル、

〔茶窓閒話〕<sup>中</sup>瀬戸の茶入、其外本邦にて焼く所の茶入は、いかやうの名物にても、盆立にせぬといふ人あれども、休師利休も瀬戸の肩衝を一兩度も盆立にせられし事あれば、苦しからぬにや、殊に貴人より拜領の茶入は、今焼にても盆立にすべしとぞ、一概に思ふべからず。

## 茶通箱作法

〔茶之湯六宗匠傳記〕<sup>四</sup>茶通箱之習事

茶通箱は、兩種の茶を入れるため、たとへば客々明日被招、忝奉存候、折ふし御茶挽おき候故、幸と存ジ、其様へおくり候と申來る時は、手前ニも濃茶を挽てある故、兩種ともニ出し振舞可申と思ふときは、茶通箱ニ茶入二ツにすることも有、又一種棗に入來れば、此方のは茶入也、何時も取ちがへたるが吉、又宇治の茶師方々、兩種を進るとて來ル事有、是又茶通箱菱皮籠ニ入ルこと有、棗は棚に横おくべし、亭主出て右のあいさつ也、先棚に向ひ箱をおろし、ふたを取てまづ客の茶をとり出し、初ハ茶入取出し、跡なる茶入ヲ真中へよせ、本のごとく蓋をして、如本たなへ上ておき、扱手前にかゝる也、是第一の習也、たて仕廻、茶入出シ、後の炭をすることもあり、又茶菓子出し、手水ニ客立たる跡ニは、又掛物にても花にてもする也、扱後の茶をたつる也、菱皮籠の手前も茶通と